

## 【追悼 倉田学児先生を偲んで】



倉田学児先生 (EICA 事務局長 / 京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 教授) が、去る 2017 (平成 29) 年 6 月 12 日に永眠されました。享年 48 歳でした。

ここに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2017 (平成 29) 年 12 月

環境システム計測制御学会 (EICA)

## 略 歴

1969 年 8 月 24 日 京都府京都市に生まれる  
 1992 年 京都大学工学部衛生工学科卒業 学士 (工学)  
 1994 年 京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻修士課程修了 修士 (工学)  
 1996 年 京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻博士後期課程退学  
 1998 年 京都大学 博士 (工学)  
 1996 年 豊橋技術科学大学工学部エコロジー工学系 教務職員  
 1998 年 豊橋技術科学大学工学部エコロジー工学系 助手  
 2007 年 京都大学大学院地球環境学堂地球益学廊 准教授  
 2008 年 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 准教授  
 2017 年 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 教授  
 2001 年 5 月～2002 年 4 月 アイオワ大学地球地域環境研究センター 博士研究員  
 2017 年 6 月 12 日 愛知県豊橋市にて逝去 (享年 48)

## 倉田学児先生を偲んで

岡山大学大学院 環境生命科学研究科 教授  
 EICA 監事

藤原健史

6 月 14 日に職場にて突然、倉田学児先生の訃報のメールを見て目を疑いました。倉田先生と少し連絡が途切れていましたが、京都大学松岡譲教授が代表の SATREPS プロジェクトが開催した東南アジアでのトレーニングワークショップでは、お元気だった気がしていました。信じられない気持ちで、会議を終えて新幹線に飛び乗り、豊橋市で執り行われたお通夜に参列し、お母様から闘病の話をお聞きしてはじめて、倉田先生がガンと闘われていたことを知りました。倉田先生は几帳面な性格なので健康には十分留意されていたでしょうから、ガンの早い進行と発見の遅れが不運だったと思います。同じ研究室出身で、研究分野も近く、良く話をしてきた小職にとって、満 47 歳の若さでお亡くなりになられたことは、非常に残念でなりません。

倉田先生は京都大学工学部衛生工学科の平岡正勝先生の研究室の出身で、小職とは在学期間中に接点はありませんでしたが、研究では共に EICA 創始者の一人である津村和志先生に師事していました。津村先生から学生だった倉田先生の高い研究能力について良くお話を聞いていました。特に、プログ

ラミング、ワークステーション、ネットワークなどの知識が豊富で、情報系に抜群のセンスを、倉田先生は学生の時から持っていました。当時、津村先生は下水処理システムの計測、制御、管理の未来型を模索されていましたが、それを具現化した一人が倉田先生であり、成果は博士論文の「下水処理プロセスシミュレータを用いた生物学的栄養塩除去システムの高度化に関する研究」にまとめられました。

倉田先生は博士課程を中退し、豊橋技術科学大学の北田敏廣研究室の教員として採用されました。そこで新たに大気汚染の大規模拡散シミュレーションに着手され、大気汚染学会等で数多く発表されました。黄砂や酸性雨の長距離輸送の研究が華やかな時代に、倉田先生は大陸から風に乗ってやってくる微粒子（PM2.5）や硫黄酸化物、窒素酸化物などの拡散計算を、観測装置を積んだ航空機から高高度の濃度を調査するプロジェクト（TRACE-P）のデータを使って精度を上げるというものでした。今では当たり前のように使われているアメリカ EPA の大気質モデリングシステム（Model-3/CMAQ）も、倉田先生は早くから研究に取り入れて、東アジアの広領域について大気汚染濃度の計算をされました。その頃、小職も松岡譲先生の研究室で准教授として大気汚染の研究をしており、大気環境学会で倉田先生と良くお会いすることが良くありました。平成 19 年に小職は岡山大学に異動することになりましたが、その後に倉田先生が松岡研究室の准教授として異動されました。倉田先生は京都大学で、並列分散コンピュータを駆使した大気拡散シミュレーション技術を発展させるとともに、排出源や排出量の推計を温室効果ガスまで広げられ、一方で室内の大気汚染の研究を行うなど、多彩な研究をされました。ちなみに、小職が管理するも持て余していた並列計算機は、倉田先生の手でフルチューンされ、研究に活かされていました。平成 23 年に始まった SATREPS プロジェクトで、倉田先生は地球温暖化政策による大気汚染防止への共便益（コベネフィット）を見出すという新しい課題に取り組みられました。マレーシア・イスカンダル地域での大気の観測、排出量の推計、拡散シミュレーション、健康影響の評価を通して、地球温暖化の対策が大気汚染の健康リスクに低減効果があることを明快に示されました。その間に、マレーシア工科大学での研究セミナーへの参加や、その大学に大気観測装置を設置する目的でマレーシアに何度も足を運ばれ、その成果を出されました。そして、このプロジェクトが、小職にとって倉田先生と接点を持つ最後の機会となりました。

倉田先生はご自身の研究に打ち込む傍ら、EICA 学会、大気環境学会、土木学会の地球環境委員会、環境システム委員会など、学会委員を多く務められました。特に EICA 学会では事務局長を務められ、学会の発展に多大な貢献をされたことは記憶に新しいところです。津村先生が学会を立ち上げられた頃から、倉田先生は初代の EICA 学会事務局員をされた波能さんのお手伝いをされていました。EICA 学会にとって、倉田先生は掛け替えのない会員だったと思います。

このように、倉田先生は研究や学会に広く活躍され、同時に関係の多くの仕事を抱えてられました。その苦労はあまり口にされませんでした。学会やプロジェクトでお会いした時には、いつもニコニコと穏やかな口調で話かけてくれました。学会やプロジェクトで一緒に行動したり、食事をしながら、共通の興味であるパソコンや情報機器のことや、大学や家庭のことなどを話しました。倉田先生からは、新製品が発売されるとすぐに入手される SONY VAIO のことや、海外で使われていた小職が知らない GPS 機器や SIM free 携帯のこと



倉田研究室ご提供（撮影 2012（平成 24）年 4 月 11 日）

や、最近の UNIX や GIS に関することとか、いろいろと教えてもらいました。家庭のことを話していたのは、倉田先生が京都に単身赴任で、小職が岡山に単身赴任という共通性があったからかもしれません。

倉田先生はいつも穏やかで、とても信頼できる人物でした。倉田先生がこれから自分の研究室を築くという時に、ご逝去されたことはほんとうに残念でなりません。倉田先生はご家族の皆様「研究者として満足のゆく人生だった」と話されたと聞いています。これまで家族や研究に対して、全力で取り組んで来られたのだと思います。

倉田学兄先生のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

## 倉田先生、安らかに

京都大学大学院 地球環境学堂 教授  
EICA 副会長

高岡昌輝

倉田学兄先生は、私とは学年が1つの違いの後輩であり、同じ京都大学工学部衛生工学科平岡研究室に所属しておりました。大学院からはちょうど工学研究科に環境地球工学専攻が新たに設立されて、平岡正勝先生は衛生工学専攻と環境地球工学専攻の両方に研究室を持っておられました。私は衛生工学専攻の平岡研で、倉田先生は環境地球工学専攻の平岡研でありました。組織的には別の研究室ではありますが、コンパや飲み会、研究室旅行などは一緒にしていました。写真は京都の日本海側の若狭和田浜へ夏休みの研究室旅行に行った時のもので、倉田先生が学部4回生の時だったと思います。当時は、7月の終わりに民宿に宿泊し、海水浴、早朝に船を出しての釣り、スイカ割、花火、飲み会、麻雀等と大変楽しい時を倉田先生とともに過ごしたのをよく覚えています。

倉田先生は柔和で、どちらかという控えめでしたが、存在感のある人物でした。彼はその当時からコンピュータが得意であり、津村和志先生の下で下水のプロセス制御の研究をしていました。その後、博士学位をとり、豊橋技術科学大学の北田敏廣教授の下で助手として働くようになり、研究の主体は大気汚染物質のシミュレーションへと変化していきました。豊橋時代は平岡研の同窓会で会うことが多かったと記憶しています。その後、京都大学大学院地球環境学堂の松岡譲教授の研究室「環境統合評価モデル論分野」の准教授として2007年に戻ってきた以後に、同僚としてまた親しく付き合うことになりました。京都大学の准教授は、専攻・コースの仕事を担当しますが、つつい元々よく知っている間柄だったので、色々な仕事（ネットワーク関係など）を頼んでいました。また、学生への教育面でも大変お世話になっていました。昨今のカリキュラムの整理の関係から、制御に関するところは学部でも大学院でもしばらく教えていない時期があり、これを復活させ、大学院の「都市代謝工学論」という授業の中で制御関係の部分を教えてもらっていました。さらには、「新環境工学特論II」という中国の清華大学とマレーシアのマラヤ大学と京大とを結んだE-learningも担ってもらっていました。倉田先生のいない授業を埋める



研究室旅行 (1991 (平成3) 年7月18日撮影)

のは本当に大変であり、存在の大きさを痛感する日々です。学外においても、私は当学会に倉田先生を引き戻した関係者の一人でありました。先にも紹介したように倉田先生は元々は制御の研究を行っていたので、当学会の最初の頃はまさに津村先生を助け、事務局的な仕事もされていたと記憶していますし、本学会誌の第1巻2号では共著の研究発表を、また、第2巻4号では第一著者としての論文も発表されています。当学会の本流を担う存在であり、彼を亡くしたことは痛惜の念に堪えません。

2016年12月のはじめに私の友人である台湾の中原大学の王先生から「日本の大気汚染の歴史的経緯を含め、講義をしてくれる先生を紹介してくれないか」と頼まれ、倉田先生にお願いしておりました。当初、倉田先生からは了承をいただき、「3月の中旬なら大丈夫でしょう」という返事をもたらしていました。しかし、その後、2017年1月12日に「腎臓周辺に少々問題が見つかったので、検査入院するので、3月の講義はできないかもしれない」との返答がありました。万が一、迷惑をかけてはいけないので、別の先生に頼む方がよいという倉田先生の判断であったと記憶しています。その後、3月に4月からの授業「都市代謝工学論」のスケジュールを組む際も、手術して戻ってくるのだから、授業は前期の後半（6月後半から7月）にしておくという話をして、倉田先生も了承してくれていました。その時は、私は倉田先生が手術をして普通に戻ってくると疑っておりませんでした。

その後、ゴールデンウィーク後に倉田先生の研究室秘書の畑中様から病状をお聞きするとともに、倉田先生が2017年6月1日付でめでたく教授に昇進したことから、一度お見舞いに行こうと思い、メールをしたのが6月8日（金）でありました。すぐに返事が来たので安心して、6月10日（土）に豊橋の病院にお見舞いに伺いました。

ベッドに座って話をすることはできましたが、一目会って大変な状況にあることはすぐに理解できました。短い面会時間でありましたが、最後には「治して大学に行きますので」と言って、立って見送ってくれました。ですので、その2日後に亡くなるとは到底思えず、6月13日（火）の朝にお亡くなりになったとの第一報を聞いた時は信じられず、茫然としました。私にとって倉田先生は後輩教授であり、これから当学会も含め、学内外の様々な仕事を一緒にやっていきたいと考えていました。あまりに早すぎました。本当に残念で仕方ありません。今は安らかにお眠りください。

心から倉田先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 倉田先生を偲んで

各務用土地利用改良区  
前 EICA 事務局

波能寿子

倉田先生の悲報に接しあまりに若過ぎる先生の旅立ちを信じることができません。

初めて倉田先生にお会いしたのは故津村和志先生の研究室で、当時はまだ京都大学の修士課程の学生さんでいらっしゃいました。

1989年 EICA の前身「環境システム計測制御自動化研究会」が会長 故平岡正勝先生、事務局長 故津村和志先生を中心に設立され、私はその事務局としてお仕事をさせていただいておりました。

同研究会発足3年目にこれまでの計測制御分野における研究発表をレビューする「EICA年報」が発行されることになりました。当時大阪大学にいらした岩堀恵祐先生を編集委員長として編集作業が始まり、倉田先生は津村先生の片腕として毎晩のように研修室で遅くまで編集作業でパソコンに向

かっておられました。アメリカの数学者によって開発された柔軟で強力、数式に強い組版のシステム「TeX」を津村先生が大層気に入っておられ、当時、津村先生の研究室の論文作成には「TeX」を使っていたらっしゃいました。第1号の「EICA年報」も経費節減で自前組版に取り組み、私も倉田先生にご指導を頂きながら「年報」編集作業のお手伝いをしておりました。倉田先生は手のかかる幼稚園生のような私の度重なる質問に、静かにじっと深く考えて丁寧にお答え下さったことは今でも忘れられません。無口で静かな学生さんでいらっしゃいましたが、頭の中はすごい勢いで回転しておられるのが感じられ、倉田先生の眠そうな顔や疲れたご様子は拝見したことがありませんでした。

津村先生が、倉田先生を“彼はとても優秀なんです。”と目をキラキラさせながら紹介して下さったこと、夜中にお腹が空いて皆さんで大学の門を乗り越えて夜食を食べに行ったこと、印刷屋さんへの原稿入稿に何とか間に合って皆さんで夜明けのコーヒーをいただいたこと、25年も昔のことですが昨日のことにように楽しく思い出されます。

豊橋技術科学大学へ移られた1996年EICAが日本学術会議登録学術団体として新たにスタートされた時は、編集委員として津村先生を支えていらっしゃいました。豊橋技科大をお訪ねした時、倉田先生はご結婚されたばかりで少しふっくらされ、はにかんでいらっしゃった笑顔が本当にお幸せそうでした。

そして京都大学へ戻られた1998年8月、津村和志先生が亡くなられた時は倉田先生とご一緒に涙で目をはらしめました。今頃はきっと天国で津村先生と熱く議論を交わしていらっしゃるのではないのでしょうか。倉田先生たくさんのご指導を本当にありがとうございました。

ご遺族の皆様をはじめ、これから清水 芳久会長を支えEICAを背負っていかれる大切な先生を失われた皆様のお悲しみご心痛はいかばかりかと存じます。

奥様のことを思いますとお慰めする言葉も見つかりません。どうぞお体を大事にされお心を強くお持ちになられますように。

倉田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 倉田先生、お疲れさまでした

滋賀県立大学 環境科学部 教授  
EICA 編集アドバイザー

井 手 慎 司

結果として、倉田学兄先生と最後にお会いしたのは、昨年(2016年)横浜市開港記念会館で開催されたEICAの第28回研究発表会でのことになった。「B-2 広領域・環境」というセッションで、私が座長で、倉田先生は「マレーシア・イスカンダル地域を対象とした低炭素施策導入による大気汚染への共便益の定量化」というタイトルでの発表であった。先生らしい、非常に精緻な研究であり、労作だったとの印象が強く残っている。10月26日のことである。あとから聞けば、その後、しばらくしてから発病が判明されたとか。しかし、発表会のときには不覚にも、体調が悪いとほまったく気が付かず、交わせたのは、挨拶程度のごくごく短い会話だけであった。

振り返れば、倉田先生とのお付き合いは、ついこないだのことものようにも思えるが、15年ほど前に遡る。EICAでは2002(平成14)年度に、平岡正勝先生の後を継ぎ、松井三郎先生が2代目の会長に就任している。この交代にともない、松井先生の門下生であった、私と現会長の清水芳久先生が、それぞれ編集委員長と事務局長を務めることになった。

編集委員長をやらなければならなくなりましたが、それまで平の編集委員しかやったことがなく、委員長として何をやればいいのか、右も左もわからない中、その年度から学会誌の発行回数を増やし、季刊発行にすることだけは私の着任前から既定路線として決まっていたようで、至急に、それに対応していかなければならなかった。そんなとき、平岡先生のお弟子さんで、力になってくれそうな良い方がいらっしゃいますよ、と関係する学会の関係者から紹介を受けたのが、当時、豊橋技術科学大学におられた倉田先生である。早速、お願いして編集委員会の委員になっていただいた。

それ以来、頼りない委員長の私を支え、学会誌の発行に尽力していただいたのが倉田先生である。2006年度から2年間は副委員長として、また、私が退いた2008年度からは2011年度まで編集委員長を、さらに、2012年度からはずっとEICAの事務局長を務めていただいた。編集委員会で議事録の作成を何度かお願いしたことがあるが、出来上がってきた議事録案が完璧かつ簡潔で、まったく加筆修正の必要がなかったことをよく覚えている。

考えてみれば、EICAの編集委員長や事務局長などの重責を10年以上の長きにわたって、担われてきたわけである。他の研究会の運営や、多くの地方公共団体の委員などの仕事も引き受けられていたと聞く。断ろうと思えば、断ることもできたであろうに。それを黙々と引き受けられておられたところが、いかにも倉田先生らしい。お人柄だろう。

私のように初期のことからのEICAを知っている人間からすれば、EICAの顔、事務局長といえば、故津村和志先生である。その津村先生が若くしてお亡くなりになられたことも、鮮烈に記憶に残っている。うかつにも、倉田先生が学生時代、その津村先生と共同で研究をされていたとは、京都大学から出された追悼文で初めて知った。しかも、逝去されたのが、その津村先生と同じ47歳であったとは。なんとという運命の皮肉だろうか。

EICA以外でのお付き合いは、ほとんどなかったが、温和で、寡黙な中にも、ときどき見せる、はにかんだような笑顔がいまでも目に浮かぶ。残念な、ただただ残念な。あまりに惜しい方を失ったものである。



EICA 総会 編集委員長として (撮影 2010 (平成 22) 年 7 月)

## 倉田学児先生へ

京都大学大学院 工学研究科附属  
流域圏総合環境質研究センター 教授 清水 芳久  
EICA 会長

突然の別れでした。本年6月12日21時5分、倉田学児先生がご逝去されてしまった。病氣療養中でしたが、今年の秋頃には大学に戻って来られるものと確信していました。お通夜の遺影は、私の大好きな柔らかな表情そのままでした。

倉田先生には、EICA 執行部への協力をお願いして、編集委員長そして事務局長として活躍して頂きました。一方では、ゆったりとした風貌そのままに、いつでも穏やかな雰囲気醸してもらいました。総会や研究発表会の際の懇親会で、いつも両手に一杯のご馳走をもって美味しそうに食べる姿が浮かびます。ある時の懇親会で「EICAはどうですか?」と倉田先生に聞いたことがありました。「色

んな人がいるので、一人一人の良いところを盗もうとしているんやけど、なかなか難しいですね」と言われました。忙しさに圧倒されてしまいそうな日々の中で、穏やかにそして積極的にいた倉田先生にはっと感動したことを覚えています。

数年前に、倉田先生が京都大学工学部地球工学科の学科教務の仕事始めて引き受けられたことがありました。私もたまたまその最初の打ち合わせに同席していました。倉田先生の手元には多くの付箋が貼り付けた前年度までの分厚い資料がありました。

京都大学工学研究科は桂キャンパスにあり、倉田先生の研究室もそこにありました。桂キャンパスでの仕事を終えて、帰宅のためのバスに乗った瞬間に、お腹がすいているものにはたまらないピザの美味しそうな臭いがバス中に充満していました。途中のバス停でピザの箱を大切に持って倉田先生が降りていきました。その時は声をかけられませんでしたでしたが、後から聞くとはにかんだ笑顔で「京都に来ていた家族へのお土産ですよ。」とのこと。大切な心遣いを感じました。

倉田先生の穏やかな表情、素敵な笑顔、独特な語り、そのお姿は今も思い出され、いつものEICAの集まりにも来てくださるような気がします。まだまだ若く、これからさらに本学会の発展にご尽力いただきたい思いでした。倉田先生への深い感謝と敬意をもって、安らかな旅立ちを心よりお祈りします。



合掌

EICA 論文賞受賞 清水会長と (撮影 2015 (平成 27 年 5 月))

## 倉田先生を偲んで (ありがとうございました)

EICA 名誉会員  
前 EICA 事務局次長

間 處 威 俊

私の倉田先生とのお付き合いは 2007 年から 2011 年の EICA の事務局の仕事をして頂いた 5 年間でした。その間でも 2008 年からの 4 年間で事務局の編集委員会業務を編集委員長として、学会誌の発行や研究発表会の準備などに常に気配りを頂き、大変にお世話になりました。この 5 年間倉田先生には大変にご心労をおかけしたこともあり、その間のことをさまざま思い返して倉田先生を偲ばせていただきます。

倉田先生に初めてお目にかかったのは、2007 年 (平成 19 年) でした。EICA の事務局が岐阜にあった時のことです。EICA の事務局のお手伝いで、東京で開催されたその年の第一回編集委員会に参加した時でした。午後 1 時から開催される委員会の開催にあたって事務局として一通り準備ができた頃に、大きなリュックを肩にかけて会議室に入って来られたように記憶しています。初対面で、ご紹介を受ける前でしたが、丸顔の随分に優しい童顔で、企業人と言うより、いかにも大学の先生がよく似合っている方だと思ったものです。

2008 年 3 月に EICA の事務局が草津に移転したのに伴い、新年度から事務局長と編集委員長が代わり、編集委員長は、副委員長をされていた倉田先生が井手先生に代わって就任されました。

EICA での事務局の日々の仕事の半分以上は、年に三回発行している学会誌「EICA」の編集に関係

するものでした。第1巻は7月、第2・3巻は10月、第4巻は翌年の3月の発行となっており、関連する編集委員会は年間5回開催されていました。委員会では特集のテーマの選定、論文投稿依頼先の検討や、寄稿文の依頼先、論文の査読評価関係の、検討など様々な議事があり、委員会前の議事次第、議事内容、資料については、丁寧に何度も読み返して、内容の間違いや、欠落について確認・指摘して頂き、修正することができました。大雑把な性格の私にとっては本当にありがたいことでした。

また、委員会が関西で開催される時には、京大の土木会館の会議室の手配も快くお引き受け頂きました。編集に関わる事務局からのお願いにはいつも気を使って頂き大変に助けていただきました。

2008年から2011年の4年間、倉田先生には学会誌の編集業務では委員長として大変ご苦勞もいただきました。特に、研究発表会の論文集の編集業務は大変なご心配をおかけしたことがありました。編集委員会では、論文の投稿募集や依頼先の手配などの準備が前の年の研究発表会が終わると間もなく始まり、論文の査読評価などは半年近くかかることもありました。

研究発表会に向け事務局では、応募を受けた論文執筆者への執筆依頼、執筆要領の送付から始めますが、論文集を予定通り発刊することができるかを定める幾つかのターニングポイントがあります。その中でも論文の入稿とその後の査読期限が予定通りに進むかどうかが一番に重要なことでした。倉田先生もそのことには常に注意を払って頂き、進行状況の確認のメールを何度となく頂きました。

特に、隔年で開催される大きな研究発表会では40編を越す論文・ノートなどが発表されます。応募された論文は、EICAの編集委員や関係する大学の先生方に査読をして、論文の評価をして頂きますが、論文の入稿時期や、査読評価の期間などを予定通りに進めることは難しく、ほとんどの場合遅れることになりました。その結果、研究発表会への発表登録済みの論文や、学会誌の割り付けの済んだ論文の遅滞への対応が事務局だけでは難しいことが多々ありました。時間に追われるなか、事務局として勝手に論文掲載を止めて穴をあけることなどはできるはずもなく頭を抱えたことがあり、そんな時に倉田先生に相談させていただくと、先生もお考えをまとめられまで一週間近くかかったと思いますが、執筆者の方への配慮をしながら学会誌に穴を空けることもない解決方法をご指示いただき無事に学会誌の発行ができたこともありました。本当に慎重でよく考え、配慮された指示を頂いた先生でした。この追悼文の執筆の機会を借りて先生のご厚情を心より感謝いたします。

まさかこんなに早くご逝去されるとは思っておりませんでした。ご家族の方々のご無念は如何ばかりかと思いますと言葉がございません。倉田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 (合掌)

## 倉田先生への追悼

EICA 事務局次長 福嶋良助

倉田先生には平成16年から学会誌の編集委員・委員長および事務局長として12年に渡り当学会を支援して頂いておりました。更に今後は副会長・会長の要職をお願いしたいと思っていた方で、突然のご逝去の報に呆然となりました。しばらく空虚な時間を味わうことになりました。先生とは事務局長をお願いしたここ数年、年度末に決算報告書の纏めや次年度の予算案の作成などご一緒にさせて頂きましたが本年度もその時期になり、先生不在の下での作成が余儀なく、改めて寂しい思いをしています。

倉田先生の教室では、先生の研究のお話もよく聞かせていただきました。先生の研究内容の1つで



ある大気汚染の推計や数理モデルの作成には、その地方の多くの情報や気象情報などが不可欠ですが途上国には十分なデータが揃っておらず、また国策として情報開示をしない国もあり、苦勞されていたことをお聞きしていました。私も20年程前に環境省の関連で、大気汚染の広域的な越境問題（東アジア酸性雨ネットワーク：ADROC）を中国や東アジア途上国との共同研究に携わる経験していましたが、当時からまさしく同じ課題を抱えていました。先生の研究課題は発展途上国の将来を大きく左右する健全な施策構築に大変重要であり、先生を失うことはその分野で影響が出るのではと懸念致します。

また近年は研究以外の大学関係のお仕事が多くなっているようで、先生のアポをお願いしても電話かメールにして欲しいとのことが多くなっていました。ただ多忙な中でもメールのお返事は必ず頂いていました。先生の几帳面な性格からだと思います。准教授から大学教授への過渡の時期になっておられたと後で聞き、本当に忙しかったのでしょうか。昨年末からお返事のメールが少し遅くなり、体調不良との情報を聞き心配していました。6月14日訃報を受けました。本当に残念です。

学会の委員会や総会の後の懇親会でお酒を飲む機会もありましたが、お酒は結構好きと聞きお酌すると笑顔で受けていただいたことが思い出されます。先生の童顔と小声でお話されるお姿が焼き付けられています。まだ40代半ば、教授に昇進されこれからが本当の成果を出され、花を咲かされることが期待されていたにも係わらず…、心残りだったでしょう。それ以上に奥様やお二人のお嬢様をお残しされる無念は如何ばかりかと存じます。

倉田先生のご冥福とご家族様のご多幸をお祈りして追悼させていただきます。



EICA 研究発表会見学会 蕪栗沼にて (撮影 2013 (平成 25) 年 11 月 午前 5 時)